

Title	モルタザー・モタッハリーの生涯
Author(s)	嶋本, 隆光
Citation	大阪外国語大学論集. 31 p.215-p.240
Issue Date	2005-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79954">https://hdl.handle.net/11094/79954</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## モルタザー・モタッハリーの生涯

嶋 本 隆 光

### The Life of Mortazā Moṭahhari

SHIMAMOTO Takamitsu

#### 糸口

1971年4月9日、モタッハリーはホセイニエ・イルシャードとの関係を最終的に断った。もはや同協会で講演することはなかった。1963年の秋の暮れ、テント張りの「講義室」を用いてこの「近代イスラーム」の教育機関は開始された。設立以来メンバーの一人であったモタッハリーは、複雑な思いの中で、しかし断固として袂を分かち決意をしたのである。<sup>①</sup>

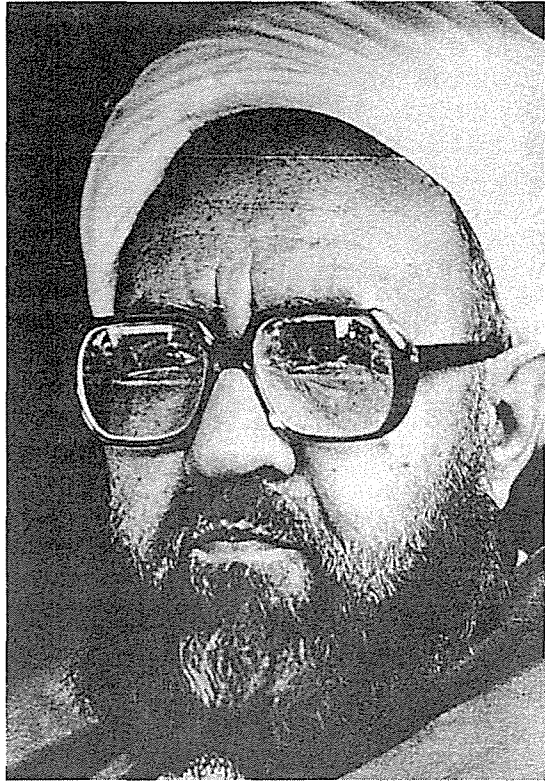
彼は同協会の副会長ではあったが、直接財務、行政的役割を果たすことはなく、主として講演会や出版関係の業務を通じて隠然たる影響力を持っていた。彼が若い頃に培った主要な思想の骨格が定まり、深化、開花したのがこの時代であったのは疑いがない。

モタッハリーがホセイニエ・イルシャードを去る直接の理由は、創設メンバーの一人ミラーチー（Naser Mirachi）の専横に対する抗議であったと言われる。<sup>②</sup>しかし、協会の財政・行政的運営上の問題と並び、おそらくそれ以上に重要な理由として、協会活動の屋台骨である講演会や出版事業の方針に関わる問題があった。具体的には、アリー・シャリアティー（‘Ali Shari’ati）との関係に代表されるように、モタッハリーが抱えて立つ思想と協会の立場にはもはや妥協を許さないほどの乖離があったのだ。

モタッハリーは1971年4月3日に協会の諮問委員会に宛てた手紙の中で、協会運営に関する最終的な提案を行った。その中で、設立当初予想もつかなかった事態が生じた現状に関しては、現実的に対応してゆけばよいとしながら、最大の問題点を克服する対策として、宗教学者（ウラマー）をメンバーに加えた運営委員会の設立とその構成員の資格について提案を行った。つまり、協会の活動、ことに講演内容は無統制であってはならない、というのである。運営委員会に二名のウラマーを参加させること、しかもそのウラマーはイジュティハードの資格を有するべきである、というのが主要な条件であった。イジュティハードというのは、高級宗教学者のみに許されている独立した法的判断を下す権限のことである。<sup>③</sup> 彼は同書簡の終わりで自らの立場を次のように述べている；

この私は、20年前に独立して思索するようになってからは、宗教学者（ruhaniyat）に関して、批判的ではあるが（同時に）真摯な支持者であり続けて参りました。この

基本を真剣に支持し、擁護しています。同時に私自身の誇りがこの階層に属することであることも承知しております。私は最も優れた人物をこの階層に見出してまいりましたし、宗教学者を1400年続くイスラーム文化の継承者であると承知いたしております。そして、私自身がこの実りの分け前を頂くもの（khosheh chini）であります。この教え（イスラーム）は必ず生き延びねばなりませんし、他の何物もその地位に取って代わることはないと確信いたしております。私は宗教学者の基盤に対抗する如何なる種類の戦線にも反対いたしますし、「宗教学者拔きのイスラーム」というテーゼを一種の帝国主義であると認識しています。と同時に、私は宗教学者層に対して一人の批判者でもあります。私は宗教学者層の中で改革（eslahati）が行われねばならないと確信しているのです。この聖なる服（僧衣）を身に着けた無資格な（na-layeq）な者が多くいます。誤ってこの聖なる服を身に着けた者や、真の宗教学者以上に宗教学者であることを見せかける（sang-e ruhaniyat ra beh sineh mi-zanand）人々に盲目的に従うべきではありません。20年も前から今日まで、私の言ったこと、書いたこと、それらはすべて二つの原則、つまり（宗教学者への）支持と批判に基づいているのです……<sup>(4)</sup>



モルタザー・モタッハリー

要するに、反宗教勢力に対する戦いと宗教勢力の抱える内部問題への対応であった。とここで、およそ20年前とは、モタッハリーが現在シーア派イスラーム世界で最高の学問の府であるコム（Qom）の町から首都テヘランへ移住した頃である。事実、モタッハリーの教育、著述、講演活動が本格化するのはいちよこの頃（1952年）からである。この意味で、主人公の生涯を理解するために、テヘラン在住期間はきわめて重要である。ただその前に、この期間の活動の意義をいっそう明瞭に理解するために、それ以前の彼の経歴を調査する必要がある。

〔生い立ちからコムに至るまで—1919—37年ごろ〕<sup>(5)</sup>

モルタザー・モタッハリーは、1919年、イラン最大の宗教都市マシュハドの南に位置するファリーマーン (Fariman) で生まれた。宗教学者の家系であった。父親はホセイン Hajj Shaykh Mohammad Hosein, 母親はスカイナといい、彼女も宗教学者の娘であった。二人には5人の男子と二人の女子、計7人の子供がいた。モタッハリー (モルタザー) は次男である。

四男のタキーによれば、<sup>(6)</sup>祖父のアリー Akhund Molla Mohammad 'Ali は、19世紀末(1878～82年ごろ)、聖地マシュハドからファリーマーンに移住してきた。地元の名士といざこざがあったが、イスラーム暦第一月モハッラム月に行われるシーア派の聖者イマーム・ホセインの殉死を追悼する集会で受難物語を見事に語った。その結果、住民から同地に留まるように要請を受け、ファリーマーンに定住することになったという。モタッハリーの父親は、この人物の第三兄であった。非常に正直な人物で、特に金銭には厳格であった。文書作成の手数料などで生活していたが、生活はつましいものであった。父親譲りなのだろうか、モタッハリーは自ら語るように、「自分は蓄財に関しては機会を放棄してしまっている、多分他の人から見れば、ちょっと気が変 (divanegi va jonun shabih-tar) に見える面があった。」<sup>(7)</sup> 一方、母親のスカイナは学問のない女性ではあったが、記憶力抜群で弁舌に優れていた。モタッハリーは母のことをコンピューターのような、と述べている。

この母親について次のような話がある。男子の子供たちは父親のもとで初歩のアラビア語の勉強をしていたが、そばで聞いていた母親は、父親の子供たちに対する質問に正しい答えを出したという。彼女は大変気丈夫で、常々貧者に対して施しを行う人物であった。弟によれば、モタッハリーの記憶力のよさや弁舌の巧みさは母親譲りである、ということになる。ただし、彼自身は生涯もの静かで、口数の少ない人物であった。

モタッハリーは、大体5歳頃に書物に興味を示し始め、父の書斎にこっそり入り込んでいた。他の子供のように子供らしい遊びをすることがなかったので、両親は心配していたらしい。友人達と川へ泳ぎに行っても裸にならないで、友達ともあまり遊ばなかったという。

10歳になって、伝統的なイスラームの学問を開始した。そして、13歳の時(1932-33年ごろ)、長男とともにマシュハドのエブダール・ハーン宗教学校という学校で2年間宗教の学生として修学した。

ところで、1930年代のイランといえば、1979年に崩壊したパフラヴィー王朝(1925～79)の創始者、レザー・シャー(1925-41在位)の時代であった。この人物は統治の初期においては、イラン社会に隠然たる影響力をもつウラマーの力を利用する政策を採ったものの、一旦自らの権力の基盤が据えられたと判断するや、イラン民族主義の名のもとに反イスラームの立場を鮮明にした。女性のチャドルの禁止、洋服の採用などが典型的な政策であった。

八代目イマームの廟があり、国内最大の聖地マシュハドにおいてもその影響が見られた。宗教的学問は概して低調であった。モタッハリー自身自伝で次のように述べている；

私は子供の頃、大体1935～36年ごろですが、ホラーサーンに住んでおりました。も

し人々の記憶にあるとすれば、ホラーサーン地方で特にあの事件の後、地域全体で2 - 3人以上の宗教家（ターバンを被っている者 mo'amem）はいなかったことがわかっています。80歳くらいの老人と、60歳ならびに70歳のモッラー、モジュタヘド、教師たちが留置されておりました。学校の扉は常に閉ざされていました。ほとんどの学校の扉は意味あって閉ざされていて、誰一人宗教が再び蘇生するなどとは信じておりませんでした。<sup>(8)</sup>

すでに述べたように、モタッハリーはマシュハドの地で2年間滞在した後、故郷のファリーマーンへ戻った。そしてさらに2年間、ひたすら読書に時を過ごした。後にこの2年間で振り返って；

私に如何なるものであれ、研究の基盤の歴史というものとすれば、それはマシュハドからファリーマーンに戻ったあの2年間と結びついています。<sup>(9)</sup>

と、述べている。

17歳または18歳になったモタッハリーは（1936年または37年）、当時シーア派世界で注目を受け始めていた宗教研究の中心地、コム（コーム）の町へ行く決意をした。この町はシーア派世界で特異な位置を占めてきた。その端緒となったのは、既述の八代目イマーム、アリー・レザー（770～818）の妹ファーターメが、マシュハドにいた兄に会うために長途メディナからイランへの旅をして、病に斃れた結果、この地に埋葬された事件である。816年のことであった。<sup>(10)</sup>

その後、権力者や一般信者の篤い信心の対象として、コム（コーム）の町は彼女の墓廟を中心に発展する。この町に関する多岐にわたる伝承を分類すると、（1）圧制者からの避難所、（2）宗教的学問の中心地、（3）神によって最も祝福された町、（4）巡礼地、などとして人々に受け入れられてきた。<sup>(11)</sup>

19世紀末に至っても、ファーターメ廟は特に女性信者の憧憬の地であるとともに、時の権力者たちは多大な代価を支払って少しでも至聖所に近い墓所を獲得しようとした。この町は首都テヘランから150キロメートルと近く、例えばカージャール王朝（1785-1925）末期、アミーヌッ・ソルターン親子は、首都とこの聖都を結ぶ幹線道路の整備に尽力した。<sup>(12)</sup>

このようにコム（コーム）の町は巡礼地、埋葬の地としては国内有数の聖地として人気があったものの、1920年代前後に至るまで学問の中心地として必ずしも盛況であったわけではない。シーア派世界では、現在のイラク南部（アタバートという）にイマームたちの聖廟が多数存在するため、伝統的に学問の中心地として栄えていた。しかし、1921年、ハーエリー（'Abd al-Karim Ha'eri Yazdi, 1859-1936）という人物がコム（コーム）に來たり、学院再興の基礎を据えたことによって、現在にいたるまでコム（コーム）はシーア派学問研究の中心地として承認されるに至ったのである。<sup>(13)</sup>

モタッハリーはこの町で宗教的学問を研鑽する決意を固めたのだが、周囲はこれに反対を唱えた。既述の通り、当時のイランはレザー・シャーの反宗教的、民族主義的政策によっ

て、宗教学者として身を立てることがきわめて困難であったことが最大の理由であった。マスジェドは閉鎖され、宗教家であった者も職業を変え、政府の役人になったりするような時代であった。特に、母親は息子にファリーマーンを離れて欲しくなかった。母親は様々な策略をめぐらせて、モタッハリーにコム行きを思いとどませようとするが、結局彼の決心を変えるには至らなかった。<sup>(14)</sup>

### 〔コム時代、研鑽〕

コムの町に移ってからの1－2年間は、まともに居住する部屋も得られないほどで、まるでトイレのような部屋で生活していたという。案の定、病気に罹ってしまった。しかし、回復してからは学問を再開し、1941年には弟（第四男のタキー、Mohammad Taqi Motahhari）をコムに誘っている。弟はこれに応じた。1937年から1952年にいたるコム滞在は、実質的に哲学者・思想家モルタザー・モタッハリーが形成された時期である。この時期に、テヘラン移住後の活動の中身がほぼすべて具体的な形で現れている。これが可能になったのは、まず何より生涯を共有する恩師と友人に出会ったことであろう。彼らとの学習、議論を通じて、モタッハリーの問題意識は徐々に鮮明になっていった。では、まず当時の学院の雰囲気について述べてみよう。

イスラーム世界の学校にも必修科目はある。アラビア語、文法、文学、論理学、コーラン解釈学、伝承学、聖者伝、法学原理などである。しかし、ほとんどすべては、いわば選択必修科目である。モジュタヘドといわれる高級宗教学者の資格を得るためには、これらの学科について該博な知識が要求される。多くは暗記中心の科目であるが、これらの分野の知識はあらかじめ定められた教師の授業に出席することによって、自動的に与えられるのではなく、学生たちが主体的に選んだ教師のもとで研鑽を行う。特に上級生になると、質疑応答の授業が中心を占める。いつ卒業の認可を得られるかは定まっていないので、何年経ってもモジュタヘドになれない者がたくさんいる。一方、教師の側からいえば、魅力のない授業しか提供できない教師に学生は集らないので死活問題である。以上がイスラーム世界の学校制度の原則である。後述するように、新たにコムにやって来たモタッハリーにとって、最大の恩恵は、優れた教師、ホメイニー（－1989）、ボルージェルディー（－1961）、タバータバーイー（1903－82）などの恩師に出会ったことである。加えて、全体としてのコムの学院に充満していた雰囲気が、彼の思想的立場を形成する上で大いに影響していたと考えられる。

ヴァーエズザーデに拠れば、<sup>(15)</sup> 設立者ハーエリーの先見の明により基盤が据えられた学院には、新しい時代に適合した学問が論議される雰囲気があったという。つまり、この時代に先立つ様々な事件、たとえば、1891－92年の反タバコ利権闘争に始まり、1905－11年の立憲革命、第一次世界大戦、さらにこの時代に一貫して観察できる英国ロシアを中心とする帝国主義諸国の侵略、確執をハーエリーは具に体験していたので、実践的な対応策を考案していた。あまり役に立たない旧態依然たる議論以上に、実質的にコムの学院、ひいてはシーア派全体の改革に留意していた、というのである。

確かにハーエリーが指導していた時代は、シーア派の宗教学者が社会・政治的に目覚め、決定的に重要な役割を果たす礎となった時期である。しかし、これには別の政治的現実が反映していた。すでに指摘したように、30年代以降とみに厳しさを加えたレザー・シャーの宗教政策に露骨に対抗するのは得策ではなく、しばらく忍耐しながら宗教制度の内面を充実させることを企てたのが実情であった。

ハーエリーが採用したこの作戦は、長期的には成功を収めたといえるが、短期的には国王の圧制に加担する効果があったことも事実である。とまれ、このときを起点にコム町は再興した。やがて、アタバートを凌駕する宗教的学問の中心地となる一步を踏み出した点は、特筆に価する。

1936年にコム再興の立役者が没した後の大事件は、ボルージェルディー（Hajj Aqa Hosein Tabataba'i-ye Borujerdi）が<sup>(16)</sup>この町に定住することになったことである。この人物は、イラン西部の州、ロレスタンなるボルージェルドに生まれた法学者である。多くの弟子の教育に従事して、1961年に他界するまで、特に法学の分野で令名が高かった。同時に高い倫理性をもつ人物としても知られていた。彼は、19世紀半ばに制度化された単一のマルジャイ・タクリード（模倣の源泉）と言われるシーア派学界で最高の学識を持つ者として受け入れられた最後の人物で、学界で広範な影響力をもっていた。

モタッハリーは法学の分野でこの人物から強い影響を受けた。特に、その厳密な方法は当代随一との定評があり、彼は所々で賞賛している。例えば；（ボルージェルディーは）

一方でシーア派とスンナ派の伝承者列伝の知識、他方でイスラーム諸分派の法令や法学に関する情報によって、時には（独自な）伝承の解釈を提示されることがありました。（つまり）、最初その伝承から意味と理解に思いをいたし、しかる後にあの方は分析を行い、（例えば）この質問をイマームに対して行った人物はある町あるいはある地域の人々であった、だから、そこでは人々は一般の法学者たちの中のある法学者の法令に従っており、その法学者の法令がこれであった。そして、その人物がその周辺にいて、彼の法令がその周辺で流布しており、後に彼の意見が先例に基づいており、その後彼の質問の意図は（実は）こうであったことが分かる。つまり、（まず）尋ねて、それから答えを聞くというのである。あの方がこれらの理由を分析し、自らの言葉で解説なさるとき、わたしたちは、質問と答えの意味と理解が入れ替わり、伝承が形を変えてしまうことが分かりました。

……（中略）

師は法学原理（osule fiqh）に関する該博な知識をもっていて、原理上疑わしい根拠に基づく法学上の問題は余りありませんでした。また、憶測で問題に対応することは決してなく、時々皮肉でおっしゃいました。学生諸君は、一つの「（確固たる）原理」を手に入れて、それを口実として、討論することを期待しているのでしょうか、と。<sup>(17)</sup>

当時のコム町指導者たちがボルージェルディーを招聘しようとした主な理由は、出身地ボルージェルドの学院復興に果たした彼の手腕と実績である。ヴァーエズザーデに拠れ

ば、ホメイニーは「ボルージェルディー師は30年遅れてコムに来られた。もし師が30年前においでになっていれば、コムの学院は学問の観点から異なったものになっていただろう」<sup>(18)</sup>と述べたという。いずれにせよ、この人物の到来によって、同地の学問、特に宗教原理、比較法学 (fiqh-e tatbiqu) の分野で著しい発展が見られた。無論、モタッハリーも大いに恩恵を受けた。

ボルージェルディーは、同時代の社会、政治問題に関しても広範な知識をもっていたが、政治に対しては終始慎重な態度を保持し続けた。実はこのような態度は、宗教学者が伝統的に保ち続けたものであって、先述のハーエリーにも当てはまる。

と同時に、現実の歴史的条件を考慮に入れることが肝要である。<sup>(19)</sup>第二次世界大戦のさ中、イランは厳正中立を宣言したにも関わらず、列強はこれを全く無視した。一方、レザー・シャーは国内における権力を確固たるものにしており、英国・ロシアにとっては必ずしも扱いやすい人物ではなかった。結局、1941年、これらの国の圧力によって国王は廃位され、モリシャス島に流された。後を受けた息子のムハンマド・レザーは、若く、軟弱な国王であった。戦後のイラン内政は混乱し、社会、経済状況の悪化が原因で共産主義勢力が台頭してきた。しかし、1951-2年の石油国有化運動とそれに続くアメリカCIAに支持された国王派のクーデターが成功し、アメリカとイランの関係は決定的となった。国王の態度は一変した。特にアメリカの財政的援助を頼む、農地改革を骨子とする「白色革命」が1960年代初めに開始され、それなりの成果を挙げると、自信を得た国王は、父親同様民族主義的、反宗教政策を採用する。象徴的事件に、1971年10月、古代アケメネス王朝ペルシアの首都、ペルセポリスを舞台に開催された建国2500年祭があった。

このようにハーエリー、ボルージェルディーと続いたコム学院の「整備」の過程は、いわば歴史状況の副産物であって、必ずしも宗教勢力が主体的かつ積極的に打ち出した方策とはいえない面があった。ただ、この準備期がなければ、後の宗教勢力の拡大はまず考えることができない。これは歴史の大きな皮肉であった。つまり、ホメイニーやターレカーニー (1910-79) そしてモタッハリーなど、79年の革命の立役者たちが徐々にではあるが着実にその環境の中で育っていたのである。

さて、話をモタッハリーに戻そう。17-8歳でコムに来たり、最初の1-2年は極貧状態で身体を壊したところまで述べた。この頃のモタッハリーは、若者らしく将来の不透明さに悩んでいた。特に思索の根本が定まらぬため、精神的に極めて不健康な状態にあった。本人はこう述べている；

私が自分の精神の変化について覚えている限りでは、13歳の時にこの胸の騒ぎを内に覚え、神に関する問題について不思議な感情を見出しました。様々な疑問 (勿論、その当時の思想の程度に応じてですが) が次から次へと私に現われました。コムに移った最初の頃は、まだアラビア語の初級も修了しておらず、このような思想の中で溺れながら、激しい「孤独」への願望が私の中にあらわれていたのです。(私の) 存在は部屋 (hojrah) に耐えることができませんでした。二階の部屋を半ば墓のような部屋に変え、一人で自らの考えとともに暮らしておりました。



その頃、私は勉強や討論をしなくてもよい自由な時間に他のテーマについて考えたくなかったし、思索の時間には、その他のあらゆる問題や、自分が人生で選択した道について考えておりました。もしこの選択の代わりに新しい研鑽の分野を選ぶとすれば、それがよりよいのだろうか、そうではないのだろうか、などと考えました。

当然、その頃の心の状態や信仰や知的な営みに対して価値を見出す傾向と同時に、私の心にまず訪れたのは、このままで私の精神と知性の状態はどのようなになるのか、ということでした。今、神の唯一性 (tawhid) の原理、預言者性、復活、イマーム性その他に対して持っている信仰、これら並々ならぬものに対して (そのころ) いとおしいと考えておりました。(ただ) もし自分が自然科学の一分野や数学、文学を選択すれば、どのような状況になっていたでしょうか。

私は自問自答していました。この原則 (イスラーム) への信奉や真実な精神は、根本的に人間が古い学問の分野を修得することとは無関係なのではないか、と。多くの人々がこの学問を捨てて、他の分野を専攻しています。それなのに、彼らは強い信仰をもっていて、実際に敬虔であり、普通のイスラームの支持者で宣揚者 (moballegheh) でもあります。さらに、多かれ少なかれ、イスラーム研究もしています。実際、私がその分野でみずからの信仰の基盤を手にすることは可能でしたし、(それは) 今手にしたものより良いかも知れないのです。<sup>(20)</sup>

このような深刻な悩みの中にモタッハリーはあったが、相変わらず通常の授業は続いていた。転機は訪れた。本人よれば、この低迷の状態は神智学 (hikmat-e elahi) との出会いによって脱出の機会を得たのである。この点は後で触れる。とまれ、迷いの隘路を脱出したモタッハリーは活発に教師や同僚と議論を行った。ヴァーエズザーデの説明によれば、社会、政治、学問の改革をめぐる討論を行い、徐々に若い学僧の間でリーダー格になっていったという。<sup>(21)</sup> そして、彼の形成したグループの中から、79年の革命以後重要な地位に就く者が輩出した。

コム学院内部は決して一枚岩であったのではなく、政治や学問上の指導権をめぐって対立、抗争が見られた。この対立は学生間のみならず、授業をめぐって教師と学生の対立としても現われた。いずれにせよ、宗教学の都コムは、再興者たちの思惑に従い、比較的自由かつ活発な雰囲気であり、モタッハリーが社会、政治的関心を明確にするのにふさわしい環境をある程度提供していたようだ。しかし、同じくヴァーエズザーデによれば、コム滞在の最後の1-2年は、彼にとって窮屈であったという。やがてモタッハリーは、躊躇しながらもこの町を去り、首都テヘランに向かう決意をした。<sup>(22)</sup>

一方、弟のタキーは、テヘラン移住直前の1952年ごろ、兄弟の経済状況は最悪であった、と述べている。1ヶ月の家賃10-15トマーンの部屋で生活しており、父親の書物を売却するなどしてしのいでいた。ちょうどその頃、テヘランでバーザール商人やその他の人々に哲学を教える仕事が転がり込んだ。給与は250トマーンであった。モタッハリーは大いに喜び、やがて大学での仕事に専念できる環境が出来上がった。<sup>(23)</sup> 1952年にテヘラン移住

を決意した主要な理由として、経済的な要因があったことは明らかである。しかしながら、彼の真骨頂が見られるのはこのテヘラン移住後であり、この出来事は彼の生涯において決定的に重要な意義を持つものであった。ただ、テヘラン時代について述べる前に、すでに触れたボルージェルディーのほかに、コム時代に出会った3人の師について解説しておかねばならない。

### 〔生涯の師との出会い〕

まず、モタッハリーの第一の師であり、79年の革命の精神的指導者といわれたホメイニーについて述べよう。この人物は、様々な点で誤解されてきた。近代史上に類例のない革命の華々しさ故に、この人物の過激性、革命性、政治性があまりにも強調されてきた。モタッハリーは、生涯、師として、また父親のごとく親しく交わった人物について以下のように述懐している；

私の偉大なる恩師は大アーヤトッラー、ホメイニー師です…

コムに移住してから、自失の状態にあった自己を他の人格の中に見出しました。私の乾いた魂は、この人物の清澄な水源によって満たされると感じました。コムへの移住の初期においては、未だ心が休まる段階に達しておらず、安易に平穩 (ma'qulat) が得られなかったとはいっても、私が敬愛する人物による木曜日と金曜日の倫理学の授業は、実際、教育 (ma'aref) と道徳 (seyar o soluk) の勉強であって、枯渇した知識の理解による倫理ではなかったもので、私を魅了しました。誇張ではなく、この授業は私を魅了したのであって、次の週の月曜日、火曜日まで、激しく私をその影響下に置きました。

私の人格の重要な部分がその授業の中で、そして後にはその尊い教師に従った12年間に学んだその他の授業において、約束されたのであって、自分が彼に魅了されたことが分かっていたし、今でもわかっています。まさしく、あの方は「神の聖なる魂 (Ruh al-Lah)」でした。

しかし、その「案内された旅 (safar-e bordeh)」において何百もの心の宿営を彼に同行しました。そこには、彼の名前、言葉の聴聞、暖かい魂、張りのある声、鉄のような意志、廉直さ、勇気、洞察力、沸き立つ信仰、特殊であるのに普通の言葉、などがありました。つまり、命の命、勇者の勇者、眼の光、イラン国民の愛しい魂である大アーヤトッラー、ホメイニー師は、よき人であり (hasanah)、神が私たちの世紀と時代へと導いてくださり、明白な証拠 (mesdaq) とされたのでした。「まことに、神はいずれの時代にも公正で偉大な人物を設けて、過誤を犯す人々の逸脱を己の宗教から取り去ってくださるのである」。

あの偉大なお方のそばで護られて知恵を得た12年間、あの智慧と寛容の源の近くにおいて感謝しながら魂と智慧の獲得に与ったことについては、徐々に多くを語ることにいたします…<sup>(24)</sup>



多少の誇張はあるのだろうが、モタッハリーのホメイニーに対する傾倒ぶりが知れる。また、彼には誰よりもイマーム（ホメイニー）に近い人物であるという自覚と自負があった。<sup>(25)</sup>

## 代表的著作一覧

年度	学術的活動	説明
1953	執筆活動 『哲学原理と現実的方法』第一巻	コム「Hikmat」所収 註と追加
1954	『哲学原理と現実的方法』第二巻	註と追加
1955	執筆活動	「Maktab-e Islam」所収
1956	『哲学原理と現実的方法』第三巻	註と追加
1957	執筆活動	「Maktab-e Tashayyo'」所収
1960	『善き人々の話 (Dastan-e Rastan)』第一巻	逸話集
1962	アーシュラーの説話 マルジャであることと聖職者 月例講話 (Goftar-e Mah)	技術者のイスラーム集会での講演 論文集 宗教の月例界での講演
1964	『20 の講話』 『善き人々の話』第二巻	イランラジオでの講演 逸話集
1966	『宗教の太陽は決して沈まない』 『人間と運命』 『イスラームにおける婦人の権利の法』	アーバーダーン大学での講演 公正 (正義) 論において 雑誌『Zan-e Ruz』の連載論文
1967	『人類の生活における不思議な援け』	アーバーダーン・ナフト大学での講演
1968	『ヘジャープ (ヴェール) の問題』 予言者性の封印	医師のイスラーム集会での講演 『ムハンマド—予言者の封印』所収
1969	『イスラームと西洋における性倫理』 『ウンマの予言者』 『ヴァラーとヴェレーヤト』 『世界の神と世界』	「Maktab-e Islam」所収 『ムハンマド—予言者の封印』所収 『カリフとヴェレーヤト』初版、所収 『イスラームの特徴 Sima-ye Islam』所収
1970	『イスラームとイランの相互的貢献』 『アリーへの興味と反発』 『神の公正』 『学習 (al-tahsil)』 『Shaykh Tusi の al-Hami』	技術者のイスラーム集会での講演 ホセイニエ・イルシャードでの講演 ホセイニエ・イルシャードでの講演 註と校正 (中止) 『Hazazeh-ye Shaykh Tusi』所収
1971	『哲学原理と現実的方法』第五巻 『物質主義に至る原因』	註と追加 Daneshsara-ye 'Ala の学生イスラーム集会 (講演)
1974	『Nahj al-Balaghah における旅』	「Maktab-e Islam」所収の教授の論文
1975	『マフディー (救世主) の蜂起と革命』 『殉教』	歴史哲学の観点から論じたもの Narmak の金曜モスクでの講演
1976	『論文集』 『歴史における人間社会の進化』	これまでの出版物、書物所収の教授の論文 シーラーズ大学での講演
1977	『10 の講話』	論文集
1978	『イランとエジプトにおける焚書』 『神の世界観と物質的世界観』 『過去 100 年におけるイスラーム運動』 『イランにおける物質主義』 『人間と信仰』 『タウヒードの世界観』 『啓示と予言者性』	ホセイニエ・イルシャードでの講演 『タウヒードの視点』所収の論文 『物質主義に至る原因』の序言 サナアティー大学での講演 『イスラームの世界観』所収 『イスラームの世界観』所収 『イスラームの世界観』所収
1979	『コーランにおける人間』 『永遠の生命と来世の生活』 『論理学と哲学』 『神智学と神学』 『イスラーム革命について』 『不和について』 『階級的立場に関するイスラームの見解』	『イスラームの世界観』所収 『イスラームの世界観』所収 エライヒヤート大学における教授の講演 エライヒヤート大学における教授の講演 教授の論文討論集 タウヒード協会での講演
1980	『社会と歴史』 『イスラーム革命に関する話』 『経済に関する議論』 『人生の目的』 『聖戦』 『コーラン入門…ハマド、バカラの章』 『コーラン入門 (コーランを知る)』 『法学原理、法学』 『哲学論考』 『秘密の散策 (Tamashageh-ye Raz)』	『社会と歴史』所収の論文 『イスラームの世界観』所収 『イスラーム革命について』所収の論文 教授の経済に関する覚え書き 1972 年における教授の授業 1971 年におけるジャヴァードモスクでの講演 教授の一連のコーラン解釈学 1973 年におけるサナーアティー大学での講演 エライヒヤート大学での授業 アダビヤート大学およびエライヒヤート大学での授業 ハーフェズに関する教授の覚え書き

ところで、ホメイニーの初期の経歴を見ると明らかなように、彼が最も得意とした学問分野は倫理学、およびイルファーン（神智学、グノーシス）であった。パーケル・モインも述べるように、<sup>(26)</sup>ホメイニーは若い頃から哲学、グノーシスに強い関心を示しており、むしろ彼の本質はこの分野であった。イブン・アラビー（Ibn 'Arabi, 1165–1240）や、特にモッラー・サドラー（Molla Sadra, d. 1641）への傾倒は顕著であり、とりわけ「完璧な人間（ensan al-kamel）」<sup>(27)</sup>の概念に基づく「ウィラーヤ（イマームの代理職）」理解は重要である。「完璧な人間」とは、人間は神の法（シャリーア）の導きに従って自己を鍛練することにより、完全になれるという信念に基づいている。すなわち、人間は完璧な状態に至るまで四つの階梯を経る。つまり、① 人間を離れ神に至り、② 神にあって神とともにいる（ファナー）、③ ②を経験した修行者は、以前の自分とは全く異なった状態で再び人間の社会に戻る、④ このように、人間は神の性格を獲得し、しかもその性質を用いて他の人々を援助する、という考えである。<sup>(28)</sup>この事情については、モタッハリー自身『イスラームの知識入門』の中でグノーシスや階梯に関して詳しい解説をしている。

重要な点は、モタッハリーの師、ホメイニーは通常考えられているような政治的過激主義者では決してなく、むしろ彼の思想の基盤は哲学、グノーシスに裏づけられたウィラーヤの思想であった。彼の思想的傾向は、1963年の事件（後述）を経て、強い政治性を帯びるようになった。実は彼の弟子モタッハリーの著作、講演を検討しても同様の特徴が見られるのであって、テヘラン移住後の1950年代から60年代に至るまでのものは、倫理色の強いものが圧倒的に多い。<sup>(29)</sup>

さて、上の引用にも見られるように、モタッハリーのホメイニーとの出会いは運命的なものであった。この関係は1963年のホルダード月15日事件、さらにホメイニーが国外追放されても断ち切られることはなかった。それどころか、70年代以降、イラン国内の社会、政治的状況が不安定になるにつれ、モタッハリーはいわば恩師の参謀の役割を果たすようになる。革命成就後は、指導者の絶大な信任を得ていたため、革命評議会のメンバーに選ばれている。

モタッハリーの人生の師として挙げなくてはならない今一人の人物は、タバータバーイ（Sayyid Mohammad Hosein-e Tabataba'i）である。この人物が特筆されなくてはならない理由は、モタッハリーの哲学思想を支える二本の太い柱、すなわちグノーシスと西洋近代哲学に関する深い造詣がこの人物と関わっているためである。唯物主義、特に西洋の無神論に対する論駁は、モタッハリーの生涯における最大の関心事であった。彼はタバータバーイに出会う大分前、25歳ころを回想し、次のように述べている；

1944年、正式に理性的学問（'olum-e 'aqli）を開始しました。これをやりたいと常々感じていたので、論理学や唯物思想を知り、それに関する意見や思想をそれぞれの本で読みました。

正確ではないのですが、おそらく1946年頃であったと思います。イランのツーデ党がエジプト国内でペルシア語かアラビア語のいずれかで出版した唯物主義者の本に出会いました。タキー・アラニー（Taqi Arani）博士の書物を見つけて丁寧に読みま

した。その頃この新しい哲学の用語に明るくなかったので、それらの問題の理解は私には困難でした。何回も読んで、ノートをとりましたし、また異なる本も参照しました。アラーニーの本の何冊かをあまり繰り返して読んだので、文章が私の頭の中にへばりついてしまいました。

1950-51年に、ジョルジュ・（不詳）の『哲学原理』を要約しました。今もその本とアラーニーの『弁証法的唯物論』からとったメモと要約を持っています。私は言葉では言い表せない熱意と情熱と興味を持って、神智哲学と唯物哲学を追及し考究した結果、まだコムにおりましたその頃、唯物哲学は実際哲学ではなく、深く神智学を知り、理解する者であれば誰でも、すべての唯物的思想を抹殺してしまうだろうと確信しました。今日に至るまで20数年が経過していても（1977年）、私は、この間この二つの哲学の研究から離れてはいませんが、日に日にその信念は確固たるものとなり、唯物哲学は哲学を知らぬ者の哲学であると思うのです。

今でも覚えているのですが、マシュハドでアラビア語の初歩を勉強していた学生時代の初めから、その他の学者や知識人、発明者（mokhtare'an）および研究者（moktashefan）の中で、哲学者や神秘主義者（'arefan）、神学者（motakalleman）〔私がどれほど彼らの思想について知らなかったとしても〕たちが、私の頭の中では重要でした。彼らを私の思索の一幕の英雄であると認識していたのは、この理由によるのでした。……<sup>(30)</sup>

モタッハリーがタバータバーイーの授業に参加したのは、1950年のことである。したがって、この時期までに、こと西洋の唯物思想についてはすでに相当の準備ができていたことが分かる。また、約2年後にテヘランに移住するので、この師の元で学んだのは2年半ほどである。モタッハリーは、後に『哲学原理—現実主義的方法』という師の講義に詳細な注釈を施し、同タイトルの大部の書物を出版している。彼は師タバータバーイーについて、こう語っている；

1950年、数年前にコムに来ておられて、さほど知られてはいなかった偉大なる教師、タバータバーイー師の授業に参加いたしまして、イブン・シーナー（Bu 'Ali Sina）の哲学を先生から学びました。そして、師が唯物哲学（falsafah-ye madi）の研究のために開講された特別授業の集まりのひとつに参加しました。この20年間に、イラン人のために唯物哲学が事実無根であることを示すために計画してきた『哲学原理—現実的方法 Osul-e Falsafah va Ravesh-e Rialisti』は、この恵みにあふれる交わりによって基礎が据えられたのです。<sup>(31)</sup>

一方、『太陽の断片 Pareh-ye Khorshid』というモタッハリーの家族や知人たちの回想録の中で、タバータバーイーのインタビューが掲載されている。そこで高齢の師は、弟子の理解力の高さを強調している。また、タバータバーイーがテヘランを訪れるときはいつでも、モタッハリーの家に滞在したという。<sup>(32)</sup>

これまでに述べた三人の恩師、ホメイニー、ボルージェルディー、およびタバターバーイーのほかに、すべての伝記記者が強調するもう一人の人物がいる。シーラーズイー（Hajj Mirza 'Ali-ye Shirazi）である。この人物はモタッハリーに『雄弁の術 Nahj al-Balaghah』という書物の奥義を伝授したことで知られる。『雄弁の術』とは、12 イマーム派シーア主義で認められた12名のイマームの中で初代の位置を占めるアリーの説教、演説、手紙などが収められた書物である。シーア派の信者にとってはコーランに並ぶ重要性を持つ。シーア派そのものが「アリーの一派（シーア・アリー）」から派生したわけであるから、この書物の意義はおおよそ察することができるであろう。

モタッハリーは、もちろん以前からこの書物を知っていたが、1941年の夏期休暇中にエスファハーンの町を訪れたとき、この師と出会ったことによって、その意味が一変した。

私自身の恩師、私の生涯に出会った最大の人物の一人であり、まさしく禁欲主義者、信者と信仰人の模範であり、歴史の中で読んだことのある真正の先達を思わせる、故シーラーズイー師について、記憶しておりますが、それについて語るのは無益ではないでしょう。

1941-42年の夏、私はコムからエスファハーンへ行き、初めてあの偉大な方にお目にかかり、傍らにいた機会を得ました。もちろん、こうして知り合ったことで、後に私のほうからは激しい愛着、またあの偉大なお方のほうでは、教師のような、また父親のような愛情へと変りました。同様に、後になってあのお方がコムに来られて、私たちのところ（hojreh）に滞在し、あのお方に愛着を抱いていたすべての学院の偉大な学者諸氏が、そこであのお方に面会いたしました。

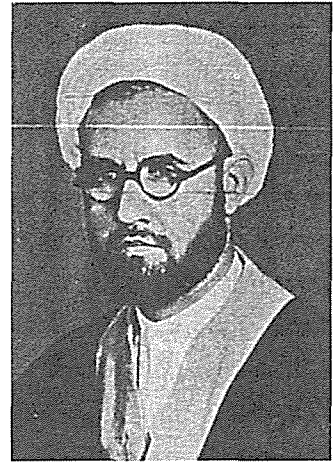
1941年、初めてエスファハーンに参りましたが、エスファハーン（出身）の人で、11年間も私の討論相手（mobaheseh）であり、今コムの学院で教師をしているモジュタヘドである人物が、<sup>(33)</sup>あることを私に提案したのです。サドル学院に偉大な学者がいて、『雄弁の術』を教えている、その人のところへ勉強しに行こう、と。

この提案は私にとって意義深いものでした。「初学者（kefayah al-osul）」と呼ばれる一介の学生が『雄弁の術』を学ぶ必要性はいったい何なののでしょうか。『雄弁の術』を一人で研究したり、また知り合って援助を得ることのできる人の力によって問題を解決する（必要性は何なののでしょうか）。

休暇中だったので、格段することがありませんでした。その提案が私の討論相手からであったので承諾いたしました。私は出かけました。しかし、すぐに自分自身の誤謬に気づきました。自分には『雄弁の術』がわかっていないことがわかったのです。自分には先生から学ぶ必要があるばかりか、『雄弁の術』の正しい教師がいなかったことを告白しなければなりません。さらに、敬虔で精神性のある人々の中の一人と対面する場合、私たち学生の言葉でいう「(旅の) 荷物が確固たるものになれば (整えば)、(案内は) 誰に求めましょうか」ということが理解できました。(そのお方は) 私が長い道のりで旅の荷物を縛り、一緒にいて恵みを受けるにふさわしい人物の一人でした。



書 斎



36才の時のモタッハリー

彼は自ら『雄弁の術』の体現者 (mojasseem) でしたし、『雄弁の術』は彼の生命の深奥に入り込んでおりました。この人物の魂は「信者の長 (Amir al-Mu'menin = イマーム・アリー・の称号)」の魂と結びつき、ぶつかり、結合していると感じました。私は常に思うのですが、まさしく私自身の魂の最大の源泉をこの偉大な人物の言葉とみなしております。(高貴なるアッラーの恵みが彼の上にあらんことを、さらに、清浄なる聖者と、無謬なるイマームたちと共にあらんことを)<sup>(34)</sup>

このように、モタッハリーがコムに滞在した期間 (1937-52) は、学者、思想家として、また指導者としての内的成長、充実の時代であった。この時代に彼の将来の活動が準備されたといってもよい。疑いもなく、この住み慣れた聖なる町を去ることにためらいはあった。しかし、すでに述べたいくつかの理由で、モタッハリーはコムを去ることになる。飛躍への出立であった。

#### 〔首都テヘランでの活動—1960年代半ばまで〕

前年結婚していたモタッハリーは、<sup>(35)</sup> 1952年テヘランに移った。そして移住後2年、テヘラン大学神学部で教授職に就いた。この環境の変化は、彼の人生の画期であった。なぜなら、これまで宗教学者に囲まれたコムの学院から若い世俗的な知識人なканずく学生、さらにバーザールの商人など、一般の信者と直接接することになったからである。この点で、パーケル・モインの次の指摘は正しい。

伝統的な宗教学院の囲いから抜け出し、非常に異なったテヘラン、ならびに大学という知的環境に入り込んだことで、モタッハリーは単に新しい知的挑戦に直面したばかりでなく、急速に変貌を遂げるイランの都会的状況の中で、イスラームの要求に応じて人生を過ごすために様々な問題を理解し、それと折り合いをつける必要性にも直面したのである。大学の外で行った多くの活動の結果として、彼はこれらの問題を広



範で多様な社会的側面から見る事ができた。というのは、彼はもとより伝統的な宗教世界とも接触を保っていたし、引き続き（その世界での）地位を高めていたのである。近代的なイスラーム的イデオロギーを作り上げようと努めたほかの多くのイラン人と、モタッハリーはまさにこの伝統的背景によって区別されるのである。<sup>(36)</sup>

モタッハリーは大学で教鞭をとる傍ら、様々なイスラーム関係の集会で講演活動を行った。その活動を通じて、イスラームが今日抱える問題群と新しい時代に対応する方策について人々を啓蒙したのである。彼は講演の原稿の大半を出版している。別掲の表に見られる（P. 225）1953年から1970年ごろまでの講演の演題目、出版物のタイトルを見ると明らかなように、テヘラン移住から16－7年間の研究テーマの中に直接政治にかかわるものがほとんどない点に気がつく。本伝記の冒頭でも引用したように、モタッハリーの基本的関心は、一つは一般信者の啓蒙活動、他は宗教学者（ウラマー）の内的墮落に対する批判であり、これと表裏する自らの属する階層の改革であった。

彼は「イスラームにおけるイジュティハードの原則（Asl-e Ijtihad dar Islam）」という講演の中で、7代目イマーム、ジャファル・サーデクの言葉に言及しながら、宗教学者の倫理性について次のように述べている；

……一人の宗教学者（yek 'alem-e ruhani）が肉的な誘惑（hava-ye nafs）に抵抗すると、一般の信者一人の抵抗には相違があります。なぜなら、各人の誘惑はそれぞれ定まった事柄にかかわっているからです。若い人に対する誘惑と老人のとは別物であるし、すべての人には地位、階層、年齢においてある種の誘惑があります。一人の宗教学者の肉的な誘惑の基準は、たとえば酒を飲むとか飲まないとか、賭博をするとかしないとか、また祈りや断食を放棄するとかしないとか、こういうものではありません。彼の誘惑の基準とは、地位、階層、手に口づけされたいとか、名声、愛情、人々が彼に従っているかどうかという関心、自らの師のために公的資金（bayt al-mal）を用いたり、あるいは、人々または身内の手、特に貴顕（aqazadegan-e gerami）の手を公的資金に染めさせるようなことなのです。<sup>(37)</sup>

ただ、この時期の活動が、表立った反政府批判に焦点が当てられず、むしろウラマーの内部改革に向けられていたのには理由があった。すなわち、シーア派学界では信者の遵守すべき法的規範の究極の拠り所として「模倣の源泉（marja' al-taqlid）」を認定するが、すべての信者はマルジャイに従う者（moqalled）として、必ず自らの従うマルジャイ・タクリドを持たなくてはならない。19世紀半ば以降、シーア派世界全体で唯一最高のマルジャイ・タクリドを認定する慣習がほぼできあがっていた。単一のマルジャイ・タクリドの権威が確立していると、シーア派共同体全体の意思の統一がきわめて容易となるからである。しかし、前記のボルージェルディーが単一のマルジャイであったころ、現実の宗教学者の権威は相当に墮ちていた。モタッハリーの自伝は、シーア派世界で最高の権威を持つはずのボルージェルディーが病氣療養でマシュハドに行く一件で、首都におけるこの人

物の認知度がどれ程低かったかを、図らずも露呈している。<sup>(38)</sup> 実際、1961年3月30日に彼が没すると、単一のマルジャイ・タクリードは選出されず、集团的マルジャ体制となった。

このように、1950～60年代の宗教界は決して活況にあったのではなく、むしろ低迷していた。既述の通り、1960年代初めに、「白色革命」に乗り出した国王（シャー）は、米国の支援を背景に露骨に宗教勢力の壊滅を謀っていた。宗教界はいわば内憂外患に苦しんでいたのである。この状況の下で、モタッハリーが自らの使命として痛感したのは反体制活動よりはむしろ、自らも含めた宗教学者自身の自己批判であり、さらにイスラームに関心を失ってしまったイラン人、特に青年層に対する教育であった。

こうして、この時期のモタッハリーの著作、講演の主題として、倫理、女性の地位など問題が好んで取り入れられた。これは、イスラームが真正の宗教であること、決して新しい時代に取り残された宗教ではないなど、人々の啓蒙活動に重点が置かれていたことを示している。

この内奥に沈潜した思索と啓蒙の時代がモタッハリーにとって真にどのような意味を持とうと、時代は静止してはいない。1963年、コムで不穏な状況が生じたのである。ファイズィエ・モスクの悲劇、ならびにいわゆるホルダード月15日事件と翌年のホメイニー国外追放事件である。

国王モハンマド・レザーは米国の援助を背景に1963年1月「白色革命」（後に「シャーと人民の革命」）を宣言した。その骨子は農地改革であったが、「革命」の五項目の中に婦人参政権の問題が含まれており、この点が宗教学者の憤激の原因となった。首都やコムの町では反対運動が起こり、人々は反政府集会を開催し、自主的に店舗や事務所を閉鎖した（バスト）。このとき、イスラーム同盟（The Coalition of Islamic Societies）が重要な役割を果たすが、この活動においてモタッハリーは、ベヘシュティー（Mohammad Hosein Beheshti）やバホナール（Mohammad Javad Bahonar）などと行動を共にしていた。一方、後イスラーム政府初代の首相になるバーザルガーン（Mehdi Bazargan）などの率いる自由運動など世俗的なイスラーム主義者による反体制運動もこれに同調していた。

これに先立ち、ホメイニーは、シャリятマダリーやゴルパーイエガーンなど慎重派、あるいは「保守派」のウラマーと協議を行った（1962年10月ごろ）。このような指導的宗教学者に対する積極的な働きかけと同時に、ホメイニーは商人たちとの関係を強化し、その知名度は一気に上昇していった。この状況の下で、宗教学者たちに指導された人々は、コムのファイズィエ・モスクに結集して、抗議を行った（1963年3月、イランの正月）。これに対して政府の強硬な弾圧が行われ、多数の犠牲者が出た（ファイズィエ・モスクの悲劇）。

さらに、政府は4月前半、これまで兵役が免除されていた宗教学者に対して兵役の義務を課した。彼らはなんら事前の連絡を受けることなく、突然兵営に連行されたという。<sup>(39)</sup> この暴挙に対して再び宗教学者を中心とする人々の反対運動が起こった。特に、6月3日はシーア派信者にとって宗教感情が最も高揚するアーシュラー、すなわち、彼らが敬慕し

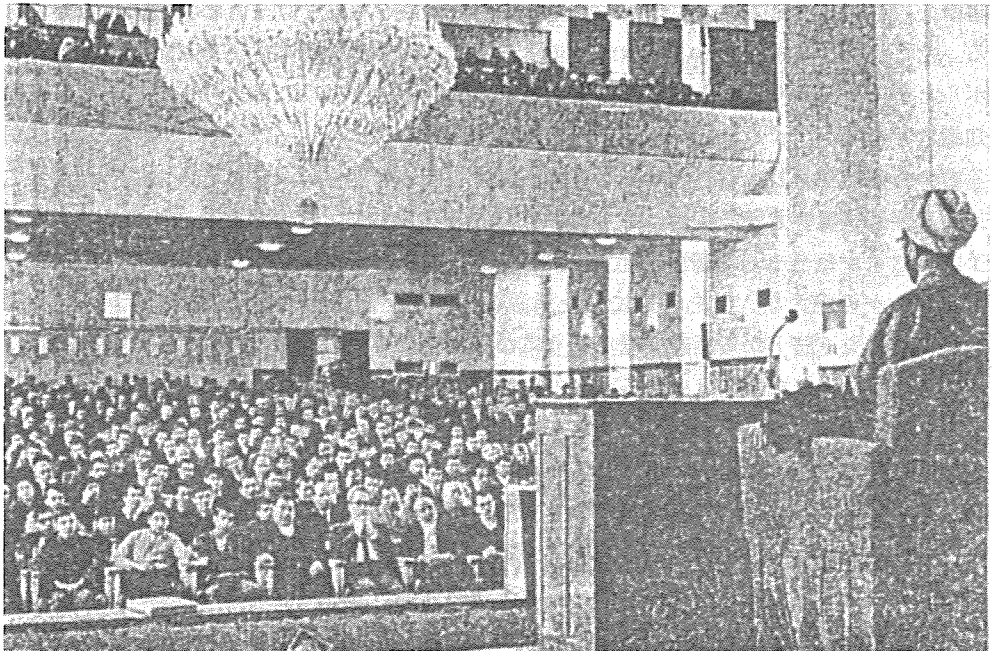
てやまない三代目イマーム・ホセインの殉教記念日であった。ホメイニーは、現体制の圧制はまさに1300年前にウマイヤ朝が行ったのと同様であり、これに敢然と立ち向かったホセインと現状を対比する説教をおこなった。コムは反体制運動で盛り上がった。この時点で確実にホメイニーは反パフラヴィー体制運動の首謀者とみなされていた。上記説教の二日後、秘密警察（SAVAK）の役人と兵士がホメイニーの住居に来て、彼を逮捕、監禁した。ホルダード月15日（またはモハッラム12日）事件に連座して60名程度のウラマーが逮捕されたが、モタッハリーもその中に含まれていた。<sup>(40)</sup> 最初の逮捕であった。一方、ホメイニーは翌年4月にいったん自宅に戻ることを許されたが、引き続き宗教勢力の反体制運動が継続される中、64年11月、再度政府はホメイニーを逮捕、そのまま空港に連行し、国外へ追放したのである（11月4日）。

この間、モタッハリーはテヘランにいて、イスラーム同盟などの活動を通じて運動との関係を維持していた。しかし、反政府運動は強力な権力によって押しつぶされた。パーケル・モインは、国外追放されたホメイニーにとってイラン国内で最も信頼できたのはモタッハリーであったという。事実、1968年、ホメイニーはモタッハリーをイラン国内における自らの代理人に任命する旨の教令（ファトワー）を發布している。その教令の中で、シーア派に固有の宗教税の中で宗教学者が自由に裁量できる「イマームの取り分（sahm-e Imam）」<sup>(41)</sup> の徴収を彼に委託し、その半分以上を宗教の振興と確立のために用いることを許可している。

このようにホメイニー追放後のイラン国内の指導を「託された」モタッハリーではあるが、1964年以降の彼の活動を見ても、相変わらず積極的に政治活動にかかわっていた印象はない。やはり、彼の最重要の関心はイスラーム離れした人々（特に若年の知識人、学生）の啓蒙活動であったように見えるのだ。モタッハリーがこのような政治に積極的に関与せず、自ら「手を汚さない」慎重な態度は、とかく彼の対抗者から厳しい批判を受けた。ホメイニー思想のもっとも正統な継承者であることを自負するこの人物にとって、主要な関心は、まず現代社会におけるイスラームの正しいあり方、これを哲学的に倫理的、社会的に体系づけ、一般の人々に納得の行く形で解説することであった。モタッハリーの本質はこの点にある。この人物は少なくとも政治指導者ではなく、運動を知的に支える参謀の役割を果たすことを本領としていたのであろう。結果的に、このような活動がなければ、革命そのものの理念が喪失する可能性は十分にあったわけである。モタッハリーの評価はこの点にかかっている。1963-64年の激動期を通して、コムでの反体制運動の苦い経験のせいだろうか、彼はむしろこれまで以上に知識人の啓蒙活動に精力を傾け始めた。その最も重要な部分が、冒頭で触れたホセイニエ・イルシャードの活動である。

#### 〔ホセイニエ・イルシャード〕

新しい時代に対応するために、主として若年の知識人にイスラームの新しい価値を認識させる教育機関として設立されたのがホセイニエ・イルシャードである。政治活動は一切その活動内容に含まれていない民間の教育機関であった。すでに述べたように、この教育



ホセイニエ・イルシャードの講義室

機関は1963年、テントの講義室で始まった。そして、1967年の冬、立派な講義室を持つ建物が新しく完成し、68年1月14日、慈善組織として登録された。設立者は、ホマーユーニー Mohammad Hodayun, アリーアーバーディー 'Abd al-Hosein' Aliabadi, ならびにミラーチー Naser Mirachi Moqaddam であった。同時に三名から構成される理事会 (hei'yat-e modireh) が結成され、ホマーユーニーが会長、モタッハリーは副会長、さらにミラーチーが会計監査であった。ただし、副会長職は要職ではなく、しかもモタッハリーは同機関の設立に果たした役割の低さから、この職にさほどの関心を示したわけではなかった。ただ、この教育機関の業務の重要な部分である、講演者の選定や出版事業に関しては並々ならぬ強い関心を持っていた。

225ページの一覧表を見ると、イルシャード期のモタッハリーが、近代的なテーマ、たとえば婦人問題、性倫理の問題などを扱っている点に注目される。この傾向は、批判的な人々から時に大衆迎合主義と揶揄されるが、この批判は的外れである。おそらく、モタッハリーは新しい時代の若者や婦人たちが高い関心を持つテーマについて、イスラームの立場から何らかの回答を与える必要性、使命感のようなものを感じていたのであろう。ただし、その立場は婦人の社会的役割に対してある程度の理解を示すものの、基本的には男女それぞれの役割分担を大前提として容認するものであった。<sup>(42)</sup> とはいえ、イスラーム社会論の画期的な一歩であった。

このように、イルシャードでの活動の初期、モタッハリーの関心は伝統墨守、頑迷固陋な宗教学者に対する挑戦、批判を含むものであった。したがって、彼が講演者として選んだ人物には、シャリアティー父子など、きわめて近代的教養を備えた人々が含まれている。

講演の内容を重視しており、講演者の聖俗の区別に対してあまりこだわりのないようである。たとえば、息子アリー・シャリアティーは<sup>(43)</sup>、後年ホメイニーに並ぶ革命運動のシンボルとまでもてはやされたが、この人物はパリで社会学を専攻し博士号を取得した世俗的知識人であった。イルシャード期初期の段階では、モタッハリーは講演者が宗教学者であるという点に必ずしもこだわっておらず、聴衆の関心の度合いが高いテーマにしたがって講演者を選ぶ寛容さがあった。しかし、70年ごろを境にして、冒頭で触れたように、ホセイニエ・イルシャードの運営方針（特に、ミラーチーの「専横」）、ならびにアリー・シャリアティーの絶大な人気を背景にした過激な講演などが主因となって、モタッハリーは徐々にイルシャードから距離を置くようになる。これに関して、シャリアティーの成功に対する嫉妬を指摘する向きもあるが、本質的な問題ではない。では、モタッハリーはなぜイルシャードの活動と絶縁したのだろうか。

故郷を離れて宗教を天職と決意してから、モタッハリーの基本姿勢は生涯あまり変化したとは思われない。関心の推移はあったものの、コム時代、テヘラン初期、ホセイニエ・イルシャード期と一貫して、倫理的関心が強かった。首都に移ってから本格的に執筆、講演活動を行う中で、テーマの中心は、やはり常に信仰、倫理である。もちろん、これらは宗教思想、哲学思想の最基底の問題であるから、これらに重点を置くことはけだし当然である。ただ、イルシャード期が終わるまで、彼は積極的に政治的（反体制的運動はもとより反イスラームのグループも含めて）内容の著作をほとんど著していない。記述の通り、彼はすでに25歳前後の段階で西洋の唯物主義の学習をかなりの熱意を持って行っていたし、コム期末期にはタバータバーイーの元で西洋哲学批判の研究をした。しかし、それらは基本的には哲学、思想レベルの問題であって、政治的過激さは見出せないのである。

ところが、1970年代からは従来見られた非ウラマーによる自由主義的講演に対する寛容さは希薄となる。たとえば、アリー・シャリアティーの代表的講演『イスラーム学 Islam Shenasi』について、モタッハリーは厳しい批判を行った。<sup>(44)</sup>つまり、この作品は散文の形を取ったイスラーム詩人の作品であって、美しく描かれてはいるものの、その大半は社会主義、共産主義、史的唯物論、実存主義に関するものであると、いうのである。この書物の最大の欠点は、イスラームの問題を論証するのに、コーラン、伝承を正当に用いていない点であるとする。また、イスラームでは神が目的そのもの、存在の根源であるのに、世界の目的に運動、進化をとり入れるなど、逸脱が著しい、と指摘している。同時に、ツーデ党を初めとする共産主義、西洋の唯物主義などの反宗教勢力に対する批判の度合いが激しさを増した。

モタッハリーにとって、ホセイニエ・イルシャードでの収穫は、ここで定期的に行った講演を通じて自らの拠って立つ立場をいっそう明確にできた点であり、さらに具体的には出版物の形でより広範な読者に自らの思索の成果を示すことができた点である。他方、ウラマー階層の中で近代主義的な視点から内部改革を目指してきたが、その過程で世俗的知識人の「逸脱」を直接体験することになった。

冒頭で引用したモタッハリーの言葉は、一面で師ホメイニーの主張の敷衍であり、同時

に、彼自身の思索の到達点でもあった。すなわち、真正のイスラームは必ず護られねばならないし、それは真正な宗教学者によってのみなされねばならないのであった。

### 〔1979年の革命、暗殺〕

ホセイニエ・イルシャードを去ってから、モタッハリーが積極的に反政府運動の前面に現れることはない。<sup>(45)</sup> いやむしろ、72～75年ころのイランは石油収入を背景した異常ともいえる好景気の中で、パフラヴィー王朝が反体制勢力を取り込むことができた時期であった。結局、この石油ブームが王朝の命取りになったのであるが、少なくとも一時的に経済問題は「解消」されたため、反体制運動の存在根拠が失われた。一部王族や直属の臣下が莫大な利益を享受したとはいっても、一般の人々もそれなりの恩恵を受けることができたからである。

だが、モタッハリーはこの間も国外追放中のホメイニーと密に連絡を保っていた。その一方で、イルシャードを去ってからの彼は、これまで同様、指導的ウラマーの倫理の重要性、一般信者に対するイスラーム教育などに関する講演や著述に加えて、より明確に唯物主義（社会主義、共産主義のみならず西洋の無神論一般）批判を展開し始める。この批判は唯物主義全般に対する思想的なものであると同時に、西洋列強の「操り人形」であるパフラヴィー王朝支配者の批判をも含蓄するものであった。さらに、唯物主義の危険性に対する警告は、国内の社会主義・共産主義的政治活動家（ツデー党など）に対しても向けられた。確かにホメイニーは、反体制運動を成功させるために極限まで左翼勢力の力を利用する戦略をとっていた。しかし、ホメイニーもその直弟子とともに、例えばモジャーヘディーネ・ハルク（人民聖戦団）のようなグループの危険性を早期から認識していたのである。<sup>(46)</sup>

このように、79年の革命が宗教革命であるための思想的裏づけは、主としてモタッハリーとその支持者によってなされていたといえる。彼自身はほぼ一貫して政治の表舞台に登場して指揮権を行使することがなかったため、自らは決して手を汚さない人物として様々な批判を受けたことはすでに紹介した。これはモタッハリーが政治活動家に分類される人物ではなく、その本質においてあくまで思想家であることによる。誠実に師の考えを継承し、敷衍しながら、それを世俗的知識人、さらには一般信者に伝えていく役割を果たした。彼はイルシャード離脱後、執筆活動はいうまでもなく、エライヒー大学、ジャヴァード・モスクなどで精力的に講演活動を継続していたのである。

「石油ブーム」後数年を経ずして、イラン経済は急激に破綻し、徐々に革命的雰囲気醸成された。そのさ中、1976年、モタッハリーはイラクのナジャフに留まっていたホメイニーを訪れて、指示を仰いだ。ついにホメイニーは、パフラヴィー王朝打倒の革命運動に「行け」の指示を出した。その翌年、モタッハリーは公権力によって公の場での説教を禁じられたが、革命が本格化する78年には押しも押されぬ革命指導者の一人として認められていた。同年暮れ、ついにクライマックスを訪れた。イラクを追われ、フランスのパリ近郊、ノーフル・ル・シャトー（Neauphle-le-Chateau）に移っていたホメイニーと会見を行

い、運動の最終的結末に関する協議を行ったのである。

1979年2月11日、革命は成就した。ホメイニーは、15年に及ぶ国外追放の末、イランに帰還したのである。宗教学者が国政を全面的に担うという現代世界史上例を見ない「宗教革命」であった。

革命後、モタッハリーは革命評議会の一員として国政の運営に枢要な役割を果たすことを約束された。しかし、ホメイニーのイラン帰還から約3ヶ月後、5月1日、とある集会に出席するため出かけたモタッハリーは、敵対者の凶弾に斃れた。フォルカーンと<sup>(47)</sup>というグループの一員による犯行だといわれる。

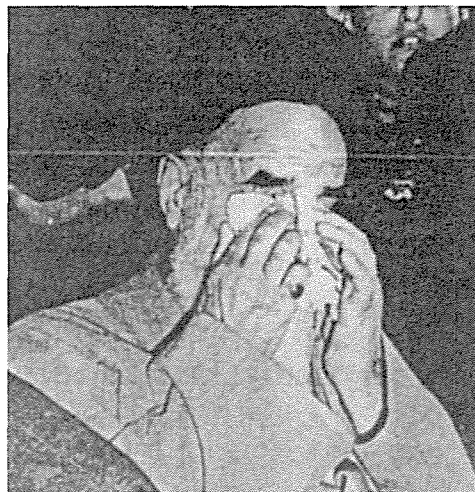
革命の立役者の一人が一瞬にしてこの世を去った。彼の葬儀に参列したホメイニーは、号泣したという。これは、普段めったに感情の起伏をあらわさない老学者の弟子に対する愛情の深さを伝えるエピソードとして知られている。彼は愛弟子の暗殺後一周忌に次の書簡を寄せた；

私が今、彼について申し上げたいことは、彼がイスラームと知識のために価値ある奉仕をしたことであり、非常に嘆かわしく思うのは、犯罪者の手によって、この実り豊かな樹木が知識とイスラームの領域から奪われて、すべての人々がその価値ある果実から切断されてしまったということでもあります。モタッハリーは私にとっては愛しい子供であり、宗教と知識の領域にとっては堅固な保障、国家にとっては価値ある奉仕者でした。神は彼を慈しまれ、イスラームの偉大な奉仕者たちの近くに位置を占めさせたもうであります。<sup>(48)</sup>

モタッハリーの亡骸は、コムのハズラテ・マースーメ（ファーターメ）廟に埋葬された。享年60歳。



フランスから帰還したホメイニー（後方にモタッハリー）



註

- 1) ホセイニエ・イルシャードの設立事情や内部の抗争, モタッハリーとシャリアティーの関係などについては, Ali Rahnema, *An Islamic Utopian; A Political Biography of Ali Shari'ati*, I.B.Tauris, London, 2000, pp.226-279, に詳しい。
- 2) Seiri dar Zendegani-ye Ustad Motahhari, Chapkhaneh-ye 'Allamah Tabataba'i, Entesharat-e Sadra, n.d. pp.93-130 に, モタッハリーがイルシャードの幹部に対して送った書簡が掲載してある。これによって, 1960 年代末から 70 年代初めに同協会内部でどのような意見の対立があったかが分かる。
- 3) イジュティハードについて, モタッハリーは「イスラームにおけるイジュティハードの原則」という講演を行っている。イジュティハードの歴史や意味, 現代における役割などについて詳しく説明がなされている。Asl-e Ijtihad dar Islam, in Dah Goftar, Daftar-e Entesharat-e Islami, n.d. pp.63-85. イジュティハードはシーア派とスンナ派では許容の範囲が異なるが, シーア派では, 理性(アクル)の使用が法学の基本原則として認められているため, 特別に重要な意味を持つ。なお, 上記論文は, 『大阪外国語大学論集』第 28 号(2003)で翻訳文を発表したので, 参照されたい。
- 4) Seiri dar Zendegani, p.119.
- 5) 本伝記の資料として, 主に次の文献を用いた。なお, 本伝記では, モタッハリーの思索活動の変化, 発展に焦点を当てているので, 個々の事件について詳細な解説は行わず, 可能な限り参考文献を提示した。さらに, 主要文献は, 以下次の略記号を用いる。
  - a. Pareh-i az Khorshid, gofteh-ha va na-gofteh-ha az zendegi-ye ostad-e shahid Mortaza Motahhari, ed. by Hamid Reza Sayyid Naseri and Imir Reza Sotudeh, Ketabkhaneh-ye Melli-ye Iran, 1378/1999 以下, PKH.
  - b. Sar Gozashteh-ha-ye Vijeh az zendegi-ye Ustad Mortaza Motahhari, Mowasseseh-ye Nashar va Tahqiqat-e Dhikr, n.d. 以下, S.G.V.
  - c. Seiri dar Zendegi-ye Ustad Motahhari, Entesharat-e Sadra, n.d. 以下, S.Z.O.
  - d. Sima-ye Ustad dar Ayeneh Negah-e Yaran, ed. by Sayyid Hamid Javid Musavi, Entesharat-e Sadra, 1371/1992. 以下, S.O.
- 6) PKH. pp.67-95, Mohammad Taqi Motahhari は, 四男で本伝記中でも言及したように, 兄モルタザーの勧めでコムに來たり, 宗教研究を行っている。家族, 親族関係のなかでは最もまとまった情報を提供している点で貴重である。先祖に関しては pp.67-71.
- 7) S.O. p.145.
- 8) S.G.V.pp.11. モタッハリーの自伝的記述は PKH.pp.17-43 ならびに S.G.V.pp.11-51 に記載されているが, 両者はほぼ同一である。これはモタッハリーが自らの著作の緒言などに記した文を編集したものである。したがって, モタッハリー自身が一貫した意図をもって記述したものではない。例えば, PKH. には彼の婦人問題に関する立場が提示されているが, この部分は S.G.V. には入っていない。
- 9) PKH.p.76.
- 10) コムの町の成立事情については, 拙訳「ハザラテ・マアスーメ(無謬なる貴婦人)の受難劇」『世界口承文芸研究—伝統的言語芸術の通文化的比較研究特集号』第 9 号, 昭和 62 年度特定研究研究報告書, 大阪外国語大学口承文芸研究会, 333-365 ページ, 昭和 63 年, の「解説」を参照されたい。
- 11) 宗教都市コムを巡る伝承に関しては, 拙稿 Some Reflections on the Origin of Qom—Myth and History—ORIENT Vol. 27, 1991, を参照。
- 12) 19 世紀におけるコムの発展拡大に関しては, 拙稿「19 世紀のコム(Qom) 市—王朝の庇護と宗教都市の発展—」, 『オリエント』第 30 巻第 1 号, 1987 年, 72-89 ページを参照。
- 13) ハーエリーの事績に関する簡単な説明は, 拙監訳グスタフ・E・フォン・グルーネバウム『イスラームの祭り』伊吹寛子共訳, 法政大学出版局, 2002 年, 「シーア派小史」173-176 ページを参照。
- 14) PKH.pp.76-77, S.G.V.12, などにその当時の様子が記されている。



- 15) S.O.pp.99-191 に Ayatollah Va'ezadeh-ye Khorasani によるモタッハリーとの 30 年にわたる交際の記録が掲載されている。ヴァーエズザーデのモタッハリー理解は、全体的印象として 彼を自由主義的でしかもホメイニーの意志を忠実に受け継いだ人物として描いている。この評価を全面的に受け入れられるかどうかはともかく、著者の記録は実際にモタッハリーとともにコム時代をすごした学友としてのみ共有できる貴重な情報を含んでいる。コムの学的雰囲気に関しては、120-138 ページに詳しく記されている。
- 16) ボルージェルディーに関しては、拙訳、ボルージェルディー『イスラームの商法と婚姻・離婚法—『諸問題の解説』翻訳と解説』、大阪外国語大学学術研究双書、29、2002 年、5-8 ページで解説した。同時にマルジャイ・タクリードや、12 イマーム派シーア主義法学の基本に関しても、同拙訳の解説を参照されたい。さらに、上掲『イスラームの祭り』『シーア派小史』158-169 ページにおいてやや詳しくマルジャイ・タクリードの制度について解説したので参照されたい。
- 17) 上掲『イスラームの商法と婚姻・離婚法』6-7 ページ。
- 18) S.O.p.126.
- 19) レザー・シャーの退位、第二次世界大戦後のイランの国内事情、とりわけ共産党（ツーデ党）などの左翼勢力の台頭に関しては、拙稿「史的唯物論とイスラーム—M. モタッハリーのイスラーム的世界観—」『大阪外国語大学論集』第 30 号（2004 年）85-89 ページを参照。さらに詳しくは、E.Abrahamian, Iran: Between Two Revolutions, Princeton, 1982, Sepehr Zabih, The Communist Movement in Iran, Los Angeles, 1966, などを参照。
- 20) S.G.V.pp.12-13. 青年時代の煩悶に関しては、'Ellal-e Gerayesh beh Madegeri の序文に詳しい精神の遍歴が記されている。この引用は、本書 6-7 ページから取られたものである。
- 21) S.O.p.140.
- 22) Ibid.p.142-3.
- 23) P.KH.p.85-86.
- 24) S.G.V.pp.18-19.
- 25) モタッハリーの息子、アリーは特に父親とホメイニーの関係を強調して、革命で果たした役割を前面に出している印象がある。P.KH.p.120.
- 26) Baqer Moin, Khomeini—Life of the Ayatollah—I.B.Tauris, London, 1999, 第 2 章と 3 章でホメイニーの学生時代の解説がなされている。特に第 3 章、すでに 27 歳くらいで神秘主義哲学に通じていた、とされる（44 ページ）。このテーマに関するホメイニーの著作で利用しやすいものに Interpretation of Surah al-Hamd in Light within Me, Ansariyan Publications, Qum, pp.121-196 などがある。
- 27) モタッハリーの重要な著作に Ensan-al Kamel, Entesharat-e Sadra, 1992, がある。人間としての完成の極地とは何か、という倫理、哲学上の問題を扱っている。私見では、モタッハリーの哲学研究の到達点はこの問題であったと考えている。云うまでもなく、「完璧な人間」の理想的モデルは初代イマーム・アリーである。
- 28) モタッハリーはイスラーム入門書として Ashena'i ba 'Olum-e Islami, Entesharat-e Sadra, n.d. を表している。それぞれの章は分冊されて出版されたが、後に一冊の同タイトルの書物としてまとめられた。そのなかで、「イルファーン（神秘主義、神秘哲学）」の章があり（80-155 ページ）、本伝記で紹介した神秘の階梯についても解説している（125-155 ページ）。
- 29) このリストは、モタッハリーの著作、講演活動に関する詳細な研究、Seiri dar Athar-e Ostad-e Shahid Mortaza Motahhari-Ketabnameh-ye tawsifi va Mawzu'i, Ketabkhaneh-ye Sadr, 1983, pp.57-60 をもとにして、若干手を加えたものである。出版年と実際の講演の年が一致しない場合があるが、1979 年の暗殺以後のものを除けば、講演の期日と出版年は大きな相違はないと推察できる。
- 30) S.G.V.pp.15-16.
- 31) Ibid.p.22. タバータバーイーに関しては、さらに同人物による Shi'eh dar Islam, Shi'ite Islam tr. by Seyyed Hossein Nasr, London, 1975, がある。「緒言」3-28 ページに訳者による詳しい解説があるので、参照されたい。
- 32) P.KH.pp.356-358.

- 33) 確実なことはいえないが、おそらくこの人物はホメイニーの後継者として、一時革命指導者の候補に上がったモンタゼリーと推察できる。
- 34) S.G.V. pp.30-32.
- 35) PKH. 97-108, に妻のインタビューが掲載されている。それによると、彼女も聖職者の家庭の出身であった。彼女の母親は、宗教学者との結婚に大反対であったという。証言によると、モタッハリーは女性に優しく理解があった。例えば、娘の教育にも大変熱心であったという。夫婦には女子4人、男子3人の子供がいたが、娘のうち二人は大学を卒業している。また、毎朝早く起きて家族のお茶を準備するという習慣があった。
- 36) Baqer Moin, op.cit. p.169.
- 37) 上掲拙訳「イスラームにおけるイジュティハドの原則」, 159-169 ページ。
- 38) S.G.V.pp.22-24, 病氣療養のためにテヘランそしてコムヘやって来たボルージェルディーがかねてよりの願、マシュハド巡礼を果たしたいと言った時、周囲の者はまだ師がテヘランの人々に十分知られていないために人物にふさわしい敬意が払われないことを恐れた。そこで、様々な理由をつけて巡礼を思いとどまるように勧めたのだが、ボルージェルディーは結局意志を通した、という。この話は、当代随一の学者の徳を示すことを意図しているが、首都でこの人物の認知度がさほど高くなかったことを示している。
- 39) S.Z.O.pp.9-26, にラフサンジャーニー元大統領の回想が記載されている。その中で、1963 年におこった一連の事件についての記述がある。特に、pp.18-23 を参照のこと。
- 40) Ibid. p.23. この年モタッハリーは初めて投獄されている。その後、1972 年にも逮捕、投獄、さらに1977 年には説教団に上ることを禁止されている。
- 41) 「イマームの取り分」とは、シーア派で信者に課せられた税金の一部分の名称である。シーア派の信者は、一年間の必要経費を差し引いた余剰収益の五分之一（ホムス）を宗教税として自身のマルジャイ・タクリドに支払うことが義務付けられている。この資金は、1) 神、2) 預言者、3) イマーム、4) 孤児、5) 貧者、6) 旅行者、に配分されることになっている。3) の項目が「イマームの取り分」である。しかし、現実には、この6つの項目の内、前3者はウラマー（特に高級宗教学者モジュタヘド）の自由裁量できる部分であった。したがって、宗教勢力が為政者から経済的に自立するという観点からきわめて重要な制度である。豊富な資金を自由に使えるマルジャイ・タクリドは必然的に広範な権力を行使することができた。さらに詳しくは、Khomeini, Masa'el-e Eqtisadi, tr. and ed. by 'Abd al-Karim bi Azar-e Shirazi, Sepehr, 1980 などを参照のこと。
- 42) モタッハリーには、イスラーム社会における婦人の位置を取り扱った著書に、Mas'aleh-ye Hejab, Entesharat-e Sadra, 1995, Nezam-e Hoquq-e Zan dar Islam, Entesharat-e Sadra, 1995. がある。
- 43) シャリアティーについては、上掲、Ali Rahnama, An Islamic Utopian, に詳しい。さらに、Marxism and Other Western Fallacies ; An Islamic Critique, tr. by R. Campbell, Mizan Press, 1980, さらに On the Sociology of Islam, tr. by Hamid Algar, Mizan Press, 1979, などがある。ただし、アルガーは、同翻訳の解説でモタッハリーとシャリアティーの思想的目標の同一性を説くなど、重大な誤りを犯している。私見では、両者の立場には1970年初期の段階で、ほとんど修正不可能なまでの齟齬が生じている。詳しくは、上掲拙稿「史的唯物論とイスラーム—M. モタッハリーのイスラーム的世界観」を参照。
- 44) Ostad Motahhari va Rowshanfekran, Entesharat-e Sadra, 1993, pp.34-59. 本書で、モタッハリーはシャリアティーの語法の誤りや思想上の問題点を、逐次検討批判している。同時にシャリアティーの時代的限界を認めながらも積極的に評価する立場の一例として、Yann Richard, Shi'ite Islam, tr. by Antonia Nevill, Blackwell, 1995, も参照のこと。
- 45) S.Z.O. pp.68-69.
- 46) PKH. p.126, Baqer moin, op.cit. p.176, その他。モタッハリーは革命運動の初期からモジャーヘディーネ・ハルクのようなグループとは信条において根本的に異なることを自覚していたという。
- 47) フォルカーンについては不明な要素が多いが、リシャルは、上掲 Shi'ite Islam, p.176 において、このグループはシャリアティーが表明していた宗教階層に敵対する立場を支持する活動組織の一つ

であるとして、モタッハリー以外にも反シャリアティーの立場を取る宗教学者を暗殺した、という。1979年、同組織は解体され、指導者は処刑されたが、同じシャリアティー主義者組織の一つ「迫害された人々の理想 (Arman-e mostaz'afan)」は、その後数年間、活動を継続していたという。なお、PKHには暗殺直前のモタッハリーとこのグループの微妙な関係が記録されている。モタッハリー自身は暗殺の可能性をはっきりと自覚していたようである。

48) Seiri dar Athar-e Ostad Shahid Mortaza Motahhari, p.21.

#### 〔付記〕

モタッハリーの思想に関しては、さらに以下の拙文を参照されたい。

「モルタザー・モタッハリーの近代西洋唯物主義（無神論）批判— B. ラッセル批判を中心に」、EX ORIENTE VOL.5, 2001, 157-182.

「モルタザー・モタッハリー（1919-1979）の社会、倫理思想の理解に向けて」

EX ORIENTE VOL.1, 1999, 227-244.

「イスラームの哲学者が見たキリスト教—M. モタッハリーの場合—」『基督教研究』第64巻、第1号、2002, 33-45.

「神の公正（'Adl-e elahi）の現代史的意義—M. モタッハリー（1919-79）の神議論」

『大阪外国語大学論集』第23号、2000, 123-139.

(2004. 12. 25 受理)